SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

A Study of Aboriginal Culture as Tourism Culture : Case study of Tjapukai Aboriginal Cultural Park in Australia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川崎, 和也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028165

観光文化としてのアボリジニ文化
－ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークの事例から－

川崎 和也（静岡大学地域創造教育センター）

1. はじめに

ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パーク（Tjapukai Aboriginal Cultural Park）は、オーストラリアの北東部にあるジャプカイ（Djabugay, Djabuganydji, Tjapukai）と呼ばれるアボリジニの歴史や文化を展示する民族観光テーマパークである。年間 15 万人以上の観光客がここを訪れるなど、オーストラリアを代表するアボリジニ観光施設のひとつである。

近年のアボリジニ観光の動向に関心を寄せる筆者は、2019 年 9 月、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークを初めて訪れた。本稿では、観察調査にもとづいてその様子を紹介するとともに、ここで展示されるジャプカイの歴史や文化の検証を通じて、観光文化としてのアボリジニ文化の一端に迫ってゆきたい。

2. アボリジニ観光の概要

アボリジニ観光とは、「アボリジニが所有・運営したり、アボリジニを雇用したり、あるいはアボリジニとその文化との関わりが認められる観光の産物」（Zeppel 1999：2）のことをいう。連邦観光調査局によると、2009 年、全国で 300 件以上のアボリジニ観光事業が展開されていたという（Tourism Research Australia 2010：1)。アボリジニ観光は、近年、急成長を遂げる観光分野である。1995 年、オーストラリアを訪れる外国人観光客のおよそ 1 割にあたる 38 万人がアボリジニ観光との関わりを持ったとされるが（Zeppel 2003：23)、2009 年にはその数は 300 万人にまで増加した（Tourism Research Australia 2010：3)。アボリジニ観光の経済効果も 1995 年は年間 500 万豪ドルであったが（Zeppel 2003：23)、2009 年にはオーストラリアの観光産業全体のおよそ 1 割にあたる 72 億豪ドルもの利益をもたらす分野に成長したという（Tourism Research Australia 2010：3)。

2.1. 国家の観光政策としてのアボリジニ観光

オーストラリアの連邦政府がアボリジニ観光に公的に言及し始めたのは 1980 年代のことである [1)]。1986 年、連邦政府は「国家観光政策（National Tourism Policy)」を策定し、アボリジニの人びとを文化的に適切な方法で観光産業に参画させる方針を打ち出した（Whitford 2009：21)。その翌年には、連邦観光省は､アボリジニの文化がオーストラリアの国家的遺産に対して固有の貢献を果たすだけでなく、オーストラリアの観光の多様性の実現に向けても重要な機会になるとの見解を明らかにしている（Whitford 2009：21)。

この時期、アボリジニ観光が注目された背景には、オーストラリアで観光産業の重要性が高まったことがある。1980 年代になると、観光の国際化が進み、海外から多くの観光客がオーストラリアを訪れる

ようになった。連邦政府は、観光産業を羊毛や石炭などの第一次産業に並ぶ外貨獲得源に位置付けて、その振興を推し進めた[2)]。アボリジニとその文化は、オーストラリアの観光の多様性をアピールするための素材のひとつとして注目されたのである。そして 1990 年代以降、連邦政府および各州政府によって、アボリジニ観光の振興に向けた組織的な支援が始められることになる。

2.2. 対先住民政策としてのアボリジニ観光

他方で、アボリジニ観光は、オーストラリアの対先住民政策の一環としても推奨された。1970 年代になると、これまでの「同化主義」に代わって、「自主運営・自主決定」が対先住民政策の基本方針として採用された。その際、アボリジニ社会に安定的な経済的基盤を構築することが、彼らの自主運営・自主決定の実現に不可欠と考えられた。それは、オーストラリアではアボリジニ社会と主流社会との間に大きな経済的格差が存在し、深刻な社会的問題と認識されていたからである。たとえば、アボリジニの所得は全国平均の訳 6 割ほどで（Altman and Nieuwenhuyusen 1979）、失業率は全国平均の 3 倍を超えるという（Rowse 2002）。アボリジニの多くが政府から給付される社会保障手当に依存した生活をする[3)]。もちろん、連邦政府や各州政府は、これまで何も対策を講じてこなかったわけではない。アボリジニ・コミュニティで林業や農業、漁業などの経済的事業の起業を後押しし、アボリジニの雇用創出や職業訓練を支援するための補助金を創設するなどしてきた。こうした取り組みの中で成果をあげたのが美術工芸品の分野である。1970 年代になると、アボリジニ美術工芸会社（Aboriginal Arts and Crafts Pty Ltd）（1971 年）やアボリジニ芸術委員会（Aboriginal Arts Board）（1973 年）が設置され、さらに全国のアボリジニ・コミュニティにアートセンターが建設されるなど、美術工芸品の生産と販売を支援するための体制が構築された（窪田 2005）。その結果、アボリジニの美術工芸品はいまや芸術作品として国際市場で高く評価され、その市場規模は 3 億豪ドルを超えるともいわれる（Koening, Altman and Griffirths 2011：352）。美術工芸品は、アボリジニ社会におけるコミュニティ・ビジネスとして大きな成功をおさめたのだった。

オーストラリアにおける観光産業の成長を背景にして、美術工芸品の後に続く、アボリジニ社会の経済発展に寄与する可能性のある産業として注目されたのが観光であった。1991 年、連邦政府の委託を受けてアボリジニの監獄死問題を調査していた特別委員会からその最終調査報告書が出された。この報告書の中で、特別委員会は、アボリジニの自主運営・自主決定の実現には、彼らを主流社会の労働市場に参画させる必要があることを指摘したうえで、観光産業がアボリジニの雇用の成長を後押しするとの見解を明らかにした（Schmiechen and Boyle 2013：59）。そして 1994 年、連邦政府は「国家アボリジニ&トレス海峡島嶼民観光産業戦略（National Aboriginal and Torres Strait Islander Tourism Industry Strategy）」を策定し、「アボリジニ観光の事業化を通じて、アボリジニ社会の自己充足と自己運営、そして彼らの経済的発展の機会を高める」（Whitford 2009：23）ことを宣言した。これによって、アボリジニ観光の振興が自主運営・自主決定の中に明確に位置付けられたのである。

3. 調査地の概要

3.1. ジャプカイ小史

ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークは、クイーンズランド州のケアンズ近郊にあるジ

ャプカイと呼ばれるアボリジニの歴史や文化を展示する民族観光テーマパークである（図 1)。ジャプカイは、クイーンズランド州の北東部を伝統領域とするアボリジニの言語集団のひとつである。彼らは、アボリジニの諸語の系統分類においては、パマニュガ語族のインディニ語群に分類されるジャプカイ語を母語とする（細川 1992：46-47)。ちなみに、ジャプカイとは、ジャプカイ語で「熱帯の森の人びと」という意味である。

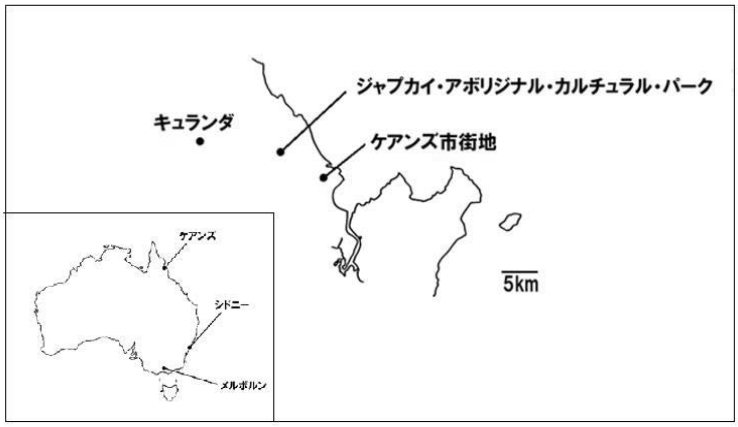


図 1　調査地の地図

ジャプカイの人びとが白人の社会文化との接触を本格的に果たすのは 19 世紀後半のことである。彼らの生活領域で金鉱脈が発見され、鉱山開発が進められたことで入植の歴史が始まった。1886 年にはケアンズとハーバートンとを結ぶ鉄道も建設され、白人たちによる入植はさらに拡大した。ジャプカイと白人との間では暴力的な衝突がたびたび繰り広げられ、およそ 5000 人いたとされるジャプカイの人口はその数を大きく減らした。またコーヒー栽培を中心とするプランテーションの開発も進められた。ジャプカイの人びとは、農園の労働者として雇用され、伝統的なコミュニティを離れて生活するようになった。このような入植経験を通じて、ジャプカイの人びとは白人の社会文化との「同化」を果たし、彼ら固有の社会文化や生活様式の多くが失われたのだった。

こうして失われたジャプカイの文化を復興する動きが盛んになるのは 1980 年代以降のことである。その代表例のひとつにジャプカイ語の復興に向けた取り組みがあげられる。当時ジャプカイ語の話者は高齢者などごく少数の人たちに限られており、絶滅の危機にあった。1987 年、言語学者や文化人類学者らが中心となって、“Community Ngirrma Classes”が始められた。これは、毎週金曜日に開催されるジャプカイ語の学習講座である。この講座は、ジャプカイ・アボリジナル組合（Djabugay Aboriginal Corporation）によって、現在にいたるまで続けられている。また文化復興とあわせて、白人による入植の過程で失われたジャプカイの土地権の回復に向けた取り組みも続けられた。2004 年、国立先住権原審判所より、バロン渓谷国立公園の土地におけるジャプカイの「先住権原（Native Title)」[4)]の存在を認める判決が出された。その後も土地権の承認を求めて裁判が続けられ、最終的にジャプカイの人びとはバロン渓谷国立公園の土地権を認められた。現在、ジャプカイの人びとは伝統的土地権利者としてバロン渓谷国立公園の運営や管理に参画している。

3.2. ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パーク

ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークはジャプカイの歴史や文化を展示する民族観光テーマパークであるが、その起源はキュランダにあったジャプカイ・ダンス・シアター（Tjapukai Dance Theater）にまでさかのぼることができる。ジャプカイ・ダンス・シアターは 1987 年に舞台芸術家のドン・フリーマン（Don Freeman）と妻のジュディ・フリーマン（Judy Freeman)、そしてデイビット・ハドソン（David Hudson）らが 6 名のジャプカイの若者たちと設立した民間のダンス公演劇場である（青

山 2008：63. Finlayson 1995：5)。その目的は、ジャプカイの人びとに雇用の場を提供することに加えて（Finlayson 1995：5)、彼らにジャプカイとしての誇りとアイデンティティを取り戻させることにあったという（青山 2008：63)。1996 年、ジャプカイ・ダンス・シアターはキュランダから現在のスミスフィールドに移転した。これにあわせて、ダンスの公演だけでなく、ジャプカイの歴史や文化を展示する民族観光テーマパークにつくり変えられ、名称もジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークに変更されたのだった。

2019 年 9 月現在、入園料は大人 62 豪ドル、子ども 42 豪ドルで、6 つのアクティビティを鑑賞・体験することができる。家族向けの割引料金も設定されており、大人 2 名・子ども 2 名で合計 166 豪ドルである。入園料に加えて、大人 26 豪ドル、子ども 16 豪ドルを払うと、次のいずれかのプログラムを追加できる。ひとつは、ブーメランの絵付けを体験できる“Cultural Creation”である。もうひとつは“Bush Food Walk”で、これは、アボリジニのツアー・ガイドと一緒に園内を歩きながら、植物の名前やその利用法などのレクチャーを受けるプログラムである。

ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークには年間 15 万人を超える人びとが訪れるという（青山 2008：67)。オーストラリア国内のみならず、海外からも多くの観光客がここを訪れる。英語のパンフレットのほか、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、そして日本語のパンフレットも用意されている。ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークは、オーストラリアで商業的に最も成功しているアボリジニ観光施設のひとつとされ、オーストラリア観光賞（Australia Tourism Award）やクイーンズランド州観光賞（Queensland Tourism Award）など、これまで数多くの栄誉に輝いている。2004 年には連邦政府の「先住民観光事業準備プログラム（Business Ready Program for Indigenous Tourism)」[5]のモデル事業にも選ばれた。さらに、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークは、オーストラリアで最も高いアボリジニの雇用率を誇る施設でもある。およそ 80 名いる従業員のうち 85％がアボリジニだという（Ryan and Huyton 2002：633）[6]。彼らは、ツアー・ガイドやパフォーマー、舞台演出係、音響係、照明係、売店の販売員、清掃員などとして働いている。

4. ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークの様子

2019 年 9 月 15 日、筆者は、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークを訪れた。この日は日曜日で、筆者が滞在するホテルのあるケアンズの市街地からジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークに行く路線バスは運休だったので、タクシーで現場に向かうことにした。ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークに到着したのは午前 11 時 8 分、ケアンズの市街地からの所要時間はおよそ 20 分で、運賃は 28 豪ドルである。

タクシーを降りると、建物の壁に大きく描かれた“Tjapukai”の文字がまず目に飛び込んできた。建物の正面にはオーストラリアの国旗のほかに、アボリジニとトレス海峡島嶼民の民族旗がそれぞれ掲揚されている（写真 1)。玄関を入ると、すぐ正面に受付カウンターがあり、白人の女性スタッフが 1 人で業務を行っていた。女性スタッフから入園料 62 豪ドルに加えてさらに 26 豪ドルを払うと、オプションのプログラムを追加できるとの説明を受けたが、今回は基本プランを選択した。現金で 62 豪ドルを支払い、さらにパスポートを女性に手渡した。彼女は、パスポートの内容を確認しながら、筆者の名前や性



写真 1　ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークの外観（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）



写真 2　園内の池に架かる橋（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）

別、生年月日、国籍などの情報をパソコンに入力した。パスポートが返却され、その際、A4 サイズの紙を二つ折りにした日本語の冊子も手渡された。この冊子にはジャプカイの歴史や神話、美術工芸品などのジャプカイに関わる基本的な情報が記載されている。さらに女性は A4 サイズの英語のパンフレットを持ち出し、それを受付カウンターのテーブルの上に広げた。6 つのアクティビティの上演時間はあらかじめ決まっていて、女性は、現在の時刻を確認したうえで、どの順序でめぐれば、すべてのアクティビティを効率よく訪れることができるか、丁寧に対応してくれた。

入園の手続きを済ませて、館内の奥を進むと、多目的ホールがある。来館者たちが休憩するためのソファーが並べられ、壁と天井にはジャプカイの絵画や工芸品が展示されている。このとき、多目的ホールの片隅でブーメランに絵付けをする人たちのグループがいた。彼らはオプションのプログラム“Cultural Creation”の参加者たちである。彼らに絵付けの指導をするのは、アボリジニの女性スタッフである。彼女は茶色のパレオを胸のあたりから身にまとって、顔や腕には白色のペイントを施している。

多目的ホールを通り抜けると、屋外に出た。目の前には大きな池があり、池には屋根の付いた橋が架かっている（写真 2)。この橋を渡ると、ここから先は野外アクティビティゾーンである。植物がうっそうと生い茂り、熱帯のジャングルを彷彿とさせる。橋から続く 1 本の遊歩道に沿って、“Creation Story”を除く、5 つアクティビティの公演施設が点在する。

Boomerang & Spear Throwing

さて、入園の手続きの際、受付の女性スタッフより“Hunting Weapon”というアクティビティが午前 11 時 30 分から始まるとの説明を受けていたので、午前 11 時 23 分、その会場に出向いたが、誰もいなかった。会場に来るのが少し早かったのかと思い、その周辺を散策していると、園内を巡回していたアボリジニの男性スタッフに呼び止められた。男性の名前はティムで、当時 38 歳。ここで働き始めてちょうど 10 年目で、現場の統括マネージャーを務める。ジャプカイに民族的なルーツがあるという。



写真 3　ブーメラン投げを体験する観光客たち（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）



写真 4　Creation Story の公演の様子（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）

「いま、ここに来たところなのか？」
「ああ、さっき着いたところだよ」
「じゃあ、ブーメラン投げをまだ体験していないよな。ちょうどいま他の観光客たちがブーメラン投げをしているところだから、まだ間に合うはずだ。案内しよう」

筆者は、ティムに連れられて、遊歩道の一番奥にある野外フィールドに向かった。現場に到着すると、8 名の観光客たちがいた（写真 3)。彼らはちょうどブーメラン投げの体験を終えたところで、結局、筆者 1 人でブーメラン投げを体験することとなった。

筆者にブーメランの投げ方をレクチャーするのは、アボリジニの男性スタッフのデイビッドである。彼は、顔や腕、胸にペイントをし、赤い腰布 1 枚だけを身にまとっている。ここで使用するブーメランは「く」の字型の回帰型ブーメランである。まず、デイビッドがブーメランの投げ方を実演してくれた。ブーメランは 30 メートルほど前方まで飛んで、弧を描きながら彼の足元まで戻ってきた。筆者はデイビッドからブーメランの握り方、ブーメランを投げる時の手首や腕の角度、動かし方などのレクチャーを受けて、いざブーメランを投げたが、20 メートルも飛ばず、筆者の足元にたどり着く前に地面に落下した。それをみていたティムは、「ブーメランを投げる時の腕の力が弱いんだ。もっと力を入れて、思い切って腕を振り下ろしてごらん」と、筆者にアドバイスした。さらに力を込めて腕を振り下ろすと、ブーメランはさっきよりは遠くに飛んだが、筆者のもとには戻ってこなかった。

Creation Story

午前 11 時 36 分、ティムは、午前 11 時 45 分から始まる“Creation Story”の公演の準備のために、ここを離れるというので、筆者も彼と一緒にその会場に向かった。“Creation Story”の会場は、多目的ホールの隣にある。会場に到着し、筆者はティムと別れた。

場内に入ると、中央にステージがあり、それを取り囲むようなかたちで座席が配置されている。いわゆるアリーナ型の会場である。筆者がここに到着したとき、すでに 1 組の男女のカップルが着席して、公演が始まるのを待っていた（なお、その後、他の観光客がここにやって来ることはなかった)。

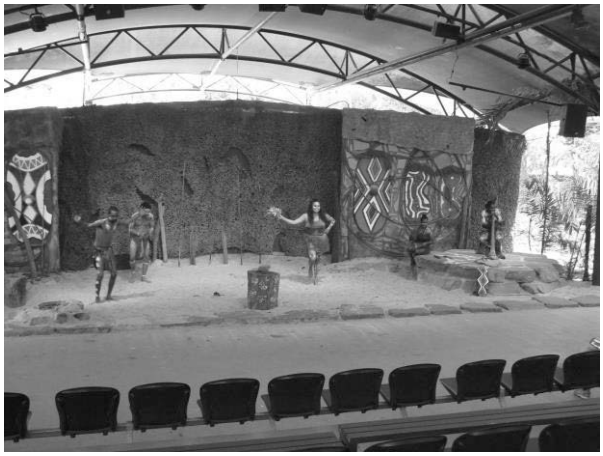


写真 5　Dance Show の公演の様子
（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）



写真 6　火おこしを体験する観光客たち
（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）

午前 11 時 47 分、場内の照明が消えて、大音量の音楽が場内に響き渡り、壁や床、天井にプジェクトマッピングの映像が映し出された。そしてしばらくすると、アボリジニの男女 2 人がそれぞれ観客席の両端から登場した。女性は胸のあたりからパレオを、男性は腰布 1 枚だけを身にまとっている。2 人は中央のステージに歩み寄り、ジャプカイの創世神話を題材とした寸劇を演じてみせた（写真 4)。

午後 12 時 2 分、“Creation Story”の公演が終了した。場内に出入口は 2 カ所あり、筆者は入場したときとは別の出口から退場した。会場を出ると、そこは小さな展示フロアであった。ここには、クイーンズランド州北東部の入植の歴史のほか、プランテーションの開発やジャプカイの権利回復の取り組みの様子を伝えるパネルが展示されていた。次に訪れる予定の“Dance Show”が始まるまでまだ時間があったので、筆者はその展示を見学した。

Dance Show

“Dance Show”の会場は、池に架かる橋を渡ってすぐ正面のところにある。会場の後方部から場内に入ると、前方にステージがあり、舞台上には砂が敷き詰められ、壁にはいくつもの美術工芸品が掲げられている。観客席はステージに向かい合うようなかたちで配置され、座席数は 300 席ほどである。筆者が会場に到着したのは午後 12 時 26 分のことである。“Creation Story”の公演で一緒だったカップルのほか、50 歳代の男性 1 人と女性 2 人のグループ[7)]が着席して、公演が始まるのを待っていた。

12 時 36 分、アボリジニの男性 3 名と女性 2 名がステージに登場し、公演が始まった。ここでも男性たちは腰布 1 枚だけを、女性たちは胸のあたりからパレオを身にまとい、いずれも顔や腕、胸、足にペイントをしている。彼らが披露するダンスは、アボリジニの伝統的なものからかけ離れたもので、アップテンポの現代的な音楽のリズムに合わせた、アクロバティックな創作ダンスであった（写真 5)。ダンスのクオリティはとても高く、ここがダンスの公演施設にルーツがあることを改めて認識させられたのだった。

また、いかなる理由によるものかは不明だが、公演の途中には観客たちを舞台に上がらせて、ダンサーたちが火おこしを披露する演出も含まれていた。男性ダンサーの 1 人が、木版の凹んだ穴に垂直に立てた木の棒を両手で挟んで、下に強く押し付けながら手をこするようにして回転させた。10 秒ほどで火

種ができ、それをヤシ科の木の皮に落として息を吹きかけると、瞬く間に燃えあがった。その後、観客たちも火おこしを体験した（写真 6)。彼らは火種をつくれず、途方に暮れていると、若い男性ダンサーが近寄ってきて「火種もつくれないのか。こんなの簡単じゃないか」と、観客たちをからかいながら「ちょっとどいてごらん」と言って、いとも簡単に火種をつくってみせた。観客の 1 人は「どうしてこんなに簡単に火種をつくれるの？」と、驚いた表情で同伴者たちにつぶやいていた。

ダンスの公演と火おこしが終わると、ダンサーたちとの記念撮影の時間である。ステージの端には写真撮影のために特別に設営された舞台がある。観客たちは、儀礼具やこん棒などの小道具を手にして、1 組ずつその舞台でダンサーたちと一緒に写真におさまった。

午後 12 時 54 分、写真撮影が終了すると、男性ダンサーの 1 人が筆者たちに「“Bush Medicine Show”はもう鑑賞したのか？」と尋ねてきた。まだ見学していないことを伝えると、男性は「じゃあ、先にその会場に行って、待っていてくれ。いまから準備してすぐに向かう」と言った。

Bush Medicine Show

“Bush Medicine Show”の会場に到着すると、別の男女のカップル[8)]が椅子に腰かけて待っていた（受付で渡されたパンフレットには、“Bush Medicine Show”は午後 1 時からの開始とある)。会場の正面に木製の大きなテーブルがあり、その上にはさまざまな種類の木の実や葉っぱ、木の枝が無造作に並べられている。

午後 1 時 8 分、“Dance Show”で筆者たちに声をかけたアボリジニの男性がさっきと同じいでたちで会場に現れた。男性は、木製のテーブルの前に立って、観客たちに今日ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークに来園してくれたことへの感謝をまず述べた。そして木製のテーブルの上にならべられた木の実や葉っぱを手に取りながら、これがどのような植物で、どこに自生するのか、そしてどのような効用があり、どのように利用するのかを解説した（写真 7)。また男性は、木の実や葉っぱを実際に観客たちに触らせたり、匂いを嗅がせるなどした。そして最後に、男性は観客たちに次のように語りかけて、“Bush Medicine Show”を締めくくった。

「皆さんに紹介した植物の数々は、かつてジャプカイの人びとが薬として利用していたものです。いま私たちはこれらを薬として利用することはありません。皆さんと同じように、薬局で薬を購入しています」



写真 7　Bush Medicine Show の様子
（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）

Digerido Show, Hunting & Weapon Show

“Bush Medicine Show”の公演を終えたアボリジニの男性スタッフは、観客たちに「“Digerido Show”を鑑賞していないだろう？」と尋ねて、全員をその会場に案内した。その途中、男性は遊歩道沿いに植えられた 1 本の木を指差して、これが“Bush



写真 8　遊歩道沿いの植物について説明するアボリジニのガイド（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）



写真 9　Digerido Show の様子（2019 年 9 月 15 日 筆者撮影）

Medicine Show”で紹介した植物のひとつであることを教えてくれた（写真 8）。ただし、筆者も含めて観客たちの全員がどの植物のことを言っているのかあまり理解していない様子であった。

“Digerido Show”の会場は“Hunting & Weapon Show”の会場でもあった。ここには、ディジャリドゥだけでなく、ブーメラン、槍、こん棒なども陳列されていた。アボリジニの男性スタッフは「“Hunting & Weapon Show”もまだ鑑賞していないだろう？」と言って、まずブーメランやこん棒の解説を始めた。一口にブーメランと言っても、それにはさまざまな種類があることを指摘したうえで、男性は、観客たちに形状の異なる 3 つのブーメランをみせながら、それぞれの特徴や用途を解説した。その次に彼が持ち出してきたのは、槍とこん棒である。これらについても、その使い方などを説明し、観客たちに実際にそれらを持たせたり、触らせたりした。とくにこん棒は、見た目とは違って、想像以上に重く、観客たちはその重さに驚いた表情を浮かべていた。観客の 1 人は、手にしたこん棒で同伴の女性の頭を殴るようなしぐさをして、ふざけあっていた。

最後はディジャリドゥの説明である。男性は、陳列している 5 本のディジャリドゥの中から 1 本を手に取って、「これは、アボリジニのトランペットだ」と冗談を言って、その場の雰囲気をなごませた。続けて、男性は、ディジャリドゥはシロアリが喰って中央部が空洞になったユーカリの木を原材料とし、儀礼で使用する道具であることを説明した（写真 9）。個人的に興味深かったのが、ディジャリドゥの吹き方の違いによって、さまざまな動物の鳴き声を表現できることであった。男性は、ディジャリドゥを使って、ディンゴとククバラの鳴き声の違いを実演してくれた。その違いは、筆者でもはっきりと聞き分けることができた。

午後 1 時 57 分、“Digerido Show”が終了した。これで、基本プランに含まれている 6 つのアクティビティのすべてを鑑賞したことになる。最後に園内にある売店を訪れて、みやげものの調査を行い[9]、午後 2 時 54 分、タクシーでケアンズの市街地へと戻った。

5. 観光文化としてのジャプカイ文化

5.1.モデル・カルチャー

ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークでは、ジャプカイの歴史や文化を観光客たちに「モデル・カルチャー（model culture)」（スミス編 2018）として提示する。モデル・カルチャーとは、民族文化の数ある要素の中から取捨選択し､「モデル」として提示される文化のことである｡これによって、非日常的な時空間において、一時的にしか滞在しない観光客たちに民族文化の概要を短時間で簡潔に伝えることができる。他方で、これは民族文化の概要を凝縮して簡略化し、典型化した「モデル」であって、いうまでもなく「本物」ではない。

ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークで観光客たちに提示される文化は、次の 3 つの点において「本物」ではない。第一に、それは本来の文脈から切り離された文化だということである。たとえば、アボリジニの男性スタッフは、ディジャリドゥについて「アボリジニのトランペットだ」と冗談を言っていたが、これは楽器ではなく、本来、儀礼のための道具である。儀礼の場で用いられることで、その本来の役割を果たすことになる。二つ目は、それらはジャプカイの人びとが現在でも日常的に実践する文化ではないという点で、「本物」ではない。たとえば、“Bush Medicine Show”の最後でのアボリジニの男性スタッフの語りを思い起こして欲しい。その語りによって、観客たちはそれまで説明された植物利用の知識や実践が遠い過去のものであるという現実を突きつけられることになる。最後は、ここでは、本来ジャプカイ社会には存在しないはずの文化がジャプカイ文化として観客たちに提示されていることである。その典型的な例がブーメランである。ブーメランは、オーストラリア大陸の中央部を中心に分布する物質文化で、ジャプカイの人びとが生活領域とするクイーンズランド州の北東部には存在するはずのないものなのである[10)]。

5.2.観光対象の真正性をめぐって

観光対象の真正性の問題は、観光社会学や観光人類学を中心とする観光研究における古典的な研究テーマのひとつで、これまで多くの議論が繰り広げられてきた[11)]。観光対象の真正性については 2 つの局面があるという。ひとつは観光対象の「客観的真正性」であり、もうひとつは「主観的真正性」である。

いまここで問題とする真正性は、観光対象の客観的真正性に関わる問題である。しかしながら、観光対象の客観的真正性の問題については、観光研究では一応の決着がついているといえよう。すなわち、観光対象の客観的真正性の問題は、観光（とくに大衆観光／マスツーリズム）における本質的な問題ではなく、観光の現場では観光対象の客観的真正性を論じること自体がなじまないのである。橋本の定義に倣うならば、観光とは「(観光客にとっての）異郷において、(観光客に）よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」（橋本 1999：12）である。観光対象がよく知られたものであれば、たとえ「本物」でなくても、それは売買の対象となる。本物であろうがなかろうが、観光の現場で人びとが出会う文化、それが「観光文化」なのである（橋本 1999：3)。

一方、観光対象の真正性に関して、近年とくに重要とされるのが、その主観的真正性の問題である。観光客は満足のゆく体験を享受できたのか、彼らはその体験をいかに評価しているのかが重要だという（橋本 2011：221-222)。それでは、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークを訪れる観光客たちは、ここでの体験をどのように評価しているのだろうか。以下では、世界最大の旅行口コミサイト

「トリップアドバイザー（TripAdviser）」に投稿されたロコミを手がかりにして、これらの点について探ってみよう。

トリップアドバイザーのジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークのページをみると、2020年1月現在、その投稿数は920件を数える。投稿者たちの評価は、5点満点中、5点527件、4点236件、3点78件、2点42件、1点37件で、全体の平均は4.5点である。次に投稿されたロコミのコメントをみてゆくと、それらは①観光施設としての評価、②展示物・展示内容の評価に関わるものとに整理できる。以下は、そのコメントを一部抜粋したものである。

① 観光施設としての評価

- 観光客向けの良い施設である。
- 文化や歴史に比重を置きすぎていて、観光的というよりも教育的な側面が強く、必ずしも観光客たちの期待に沿うものではない。
- 観光的でなく、教育的であるのが良い。

② 展示物・展示内容の評価

- 「本物」であった。
- 「本物」ではなかった。
- ここの展示はあまりにも現代的すぎて、アボリジニのイメージにはそぐわない。
- きわめて限られた文化のみが展示されていた。

5.3.イメージの確認行為としての観光

さて、ここでは、上記のコメントにある「本物」という言葉に注目してみよう。「本物」であるとは、いったいどういうことなのだろうか。なにをもって「本物」とするのだろうか。残念ながら、ここに投稿されたコメントからは、観光客たちがなにを「本物」と考えているかをうかがい知ることはできない。しかしながら、ゼッペルの研究によると、アボリジニ観光に参加する観光客たちは、一般的に以下のものを「アボリジニらしさ」を構成する要素として考えているという（Zeppel 1999：24-25）。

- 肌の色の黒さ
- 腰布
- ボディペインティング
- ディジャリドゥ
- ブーメラン
- ダンス
- 神話
- 狩猟採集
- 動植物およびその利用に関わる豊富な知識と実践

また、これらに加えて、近年ではアボリジニの美術工芸品の国際的な評価の高まりを受けて、美術工芸品も「アボリジニらしさ」を構成する重要な要素として広く認識されている。

こうしてみると、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークで展示される文化の多くが、アボリジニ観光に参加する観光客たちが思い描いている「アボリジニらしさ」を構成する要素とほぼ一致することが分かる。ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークでは、観光客のイメージの中に

ある「アボリジニらしさ」を投影した文化的要素が選び取られ、それらがジャプカイ文化として観光客たちに提示されていると考えられるだろう。

このことは、ある意味、観光という現象の本質を反映していると言えるかもしれない。観光対象への欲望が観光客たちの「まなざし」によってつくられることを指摘するのは、アーリである。観光客は、メディアによって視覚的かつ記号的につくられた、自分たちの日常に対してなんらかの差異のあるものにまなざしを向けて、それを観光対象として消費するという（アーリ＆ラースン 2014：4-8)。また、観光をイメージの確認行為と定義したのは、ブーアスティンである。それによると、われわれは、現実そのものよりもメディアによってつくられたイメージのほうが現実感を持つ世界、すなわち「擬似イベント」を生きているという。観光客は、メディアによってつくられた観光対象のイメージに惹きつけられて、そのイメージに似ているかどうかを知りたいという好奇心から観光地を訪れる（ブーアスティン 1964：126)。そして訪れた観光地で自分の頭の中にあるイメージが確かめられたとき、観光客の欲求は満たされるのである（ブーアスティン 1964：120)。この点については、ゼッペルがあるエピソードを紹介している。それによると、アメリカからの観光客たちが中央砂漠地域にあるアボリジニ観光施設を訪れて、アボリジニによるダンスパフォーマンスの公演を鑑賞していたが、公演途中であるにもかかわらず、突然その場を立ち去ったという。彼らは、自分たちが「アボリジニらしさ」を構成する要素として重要と考えるディジャリドゥがその公演で演奏されなかったことに不満を抱いて、その場を立ち去ったのだった（Zeppel 1999：24)。

6. おわりに

オーストラリアでは、アボリジニ観光は国家的な観光政策ならびに対先住民政策を進めてゆくうえで重要な資源に位置付けられて、近年、急成長を遂げている。一方、アボリジニたちにとっても、それが雇用を創出し、現金収入を得るための機会になるなど、その経済的な意義の大きさが指摘されている（Altman 1989. Finlayson 1995. Zeppel 1999)。さらにアボリジニたちによる観光産業への参画が彼らの政治的状況を改善するための手段となっているとの指摘もある（Altman 1989；1996)。

他方で、観光は、ホストとゲストの関係によって成立する現象でもある。観光対象への欲望は観光客たちのまなざしによってつくられ、彼らはそのイメージを確認するために観光地を訪れる。ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークでは、そうした観光客たちの期待を裏切らないように、彼らが思い描いている「アボリジニらしさ」に即した文化的要素を選び出し、それを観光客たちに提示しているといえよう。このような観光におけるホストとゲストの関係のあり方については、「(ゲスト）からまなざしを向けられる客体としてのホスト／（ホスト）にまなざしを向ける主体としてのゲスト」というように、両者の非対称的な関係性が指摘され問題視されている（太田 1993. スミス編 2018)。それでは、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークにおけるそれもまたホストとゲストの非対称的な関係性を反映したものとして理解できるだろうか。今回の訪問ならびに調査は、観光客の側の視点に立った「外側」の、いわゆるゴフマンの言うところの「表舞台」（ゴフマン 1974)、あるいはマキャーネルの言う「演出された真正性」（マキャーネル 2012）のみの調査にもとづくものであることから、この問いに対して、いまここで何らかの結論を下すことは時期尚早だろう。

ジャプカイの人びとは、観光という文脈においては、観光客たちの「アボリジニらしさ」のイメージ

の中でしか自らの文化を語ることができないのだろうか。それとも、これは彼らの戦略にもとづく実践なのだろうか。そしてなによりも、当事者であるジャプカイの人びとはこうした状況をどのように考えているのだろうか。これはジャプカイの人びとにとっての観光対象の主観的真正性の問題とも深く関わってくる重要なテーマでもある。これらの点については、これからの調査研究の課題としたい。

脚注

1) パーソンズは1840年代のオーストラリア南部の都市部で暮らす白人たちの間で週末の娯楽として人気のあった「コロボリー（corroboree)」の訪問をアボリジニ観光の原型とみなしている（Ryan and Huyton 2000：54)。またオーストラリアでは、アボリジニ観光は「環境観光」と結びついて発展してきたとの指摘もある（Altman 1989)。国立公園における観光はその代表例のひとつで、アボリジニの文化遺産は豊かな自然とともに重要な観光資源に位置付けられた。しかし、それらはあくまでも自然的景観を構成する要素の一部として位置付けられるに過ぎなかった。
2) 1990年代になると、観光産業は、長年オーストラリア経済を支えてきた羊毛や石炭などの輸出額を上回る外貨獲得源となり、オーストラリア経済全体を牽引する産業にまで成長を遂げた（窪田 2010：44)。
3) たとえば、2007年以来、筆者が調査を続けるオーストラリア北部のメルヴィル島にあるミリカピティ村では、定職に就く住民は3割ほどで、残りの住民たちは失業者である（川崎 2014)。
4) 1992年、クイーンズランド州にある島の所有権をめぐって、先住民であるトレス海峡島嶼民が原告となって州政府との間で繰り広げた裁判に対する判決が出された。この裁判は原告の勝訴で結審したが、その意義は、裁判所がトレス海峡島嶼民の人びとによる固有の神話や儀礼、生業などを通じた特定の土地との関わりを土地所有制度として認定し、白人が入植した当時のオーストラリア大陸の土地が「無主の地」であったとする従来の見解を否定した点にある。そのうえで、裁判所は、彼らが「先住権」を主張するための法的権利の発生根拠となる「先住権原」という概念を明らかにした（細川 1997：188-189)。この判決を受けて、連邦政府はただちに先住権原の法制化に着手し、翌年「先住権原法（Native Title Act)」を成立させた。
5) 「先住民観光事業準備プログラム」は、アボリジニ観光の事業化を支援するために、2004年に連邦政府が創設した補助金制度である。初年度は、ジャプカイ・アボリジナル・カルチュラル・パークを含む6つのアボリジニ観光事業者に対して総額400万豪ドルの助成が行われた（Whitford 2009：23)。
6) ただし、ここで働くアボリジニの従業員のすべてがジャプカイというわけではなく、他のアボリジニの言語集団にルーツを持つ人たちも働いている（Ryan and Huyton 2002：633)。
7) 3人は、ポーランドからの観光客である。
8) 2人は、シドニーからの観光客である。
9) みやげもの調査の結果については、別の機会に論じることにしたい。
10) このとき、ブーメランが本来ジャプカイに存在しないものであるとの説明はなかった。
11) たとえば、「擬似イベント」（ブーアスティン 1964)、「演出された真正性」（マキャーネル 2012)、「観光リアリズム」（ブルーナー 2007）など。
12) この地域のアボリジニ社会には、ディジャリドゥを演奏する慣習はない（Zeppel 1999：24)。

参考文献

Altman, J.

1989　Tourism Dilemmas for Aboriginal Australians. *Annuals of Tourism Research* Vol.16, 456-476.

1996　Coping with Location Advantage: Tourism and economic development at Sesia community, Cape York Peninsula. *The Journal or Tourism Studies* Vol.7-1, 58-71.

Altman, J. and Nieuwenhuyusen, J.

1979　*The economic status of Australian Aborigines*. Cambridge University Press.

青山晴美

2008　「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業の実態－マーケット調査とケーススタディ№1」「愛知学泉大学・短期大学紀要」第43号：63-72.

ブルーナー・E

2007　『観光と文化－旅の民族誌』安村克己・遠藤英樹・堀野正人・寺岡伸悟・高岡文章・鈴木涼太郎訳、学文社.

ブーアスティン・D・J

1964　『幻影の時代－マスコミが製造する事実』星野郁美・後藤和彦訳、東京創元社.

Finlayson, J.

1995　*Aboriginal employment, native title and regionalism*. CAEPR Discussion Paper №87. Center for Aboriginal Economic Policy Research, Australian National University.

ゴフマン・E

1974　『行為と演技－日常生活における自己呈示』石黒毅訳、誠信書房.

橋本和也

1999　『観光人類学の戦略－文化の売り方・売られ方』世界思想社.

2011　『観光経験の人類学－みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社.

細川弘明

1992　「アボリジニの言語」小山修三ほか編『オーストラリア・アボリジニー狩人と精霊の5万年』産経新聞社、46-48.

1997　「先住権のゆくえ―マボ論争からウィック論争へ」西川長夫・渡辺公三・マコーマック編『多文化主義・多言語主義の現在－カナダ・オーストラリア・そして日本』人文書院、177-199.

川崎和也

2014　「アボリジニの家計簿－オーストラリア北部ティウィの日常生活における現金使用を事例として」『京都文教文化人類学研究』第8号：37-61.

Koening, J. Altman, J. and Griffirths, A.D.

2011　Indigenous Livehoods and Art Income: participant, production and returns from woodcarvings in Arnhem Land, North Australia. *Australian Geographer* Vol.42-4, 351-369.

窪田幸子

2005 『アボリジニ社会のジェンダー人類学－先住民・女性・社会変化』世界思想社.

2010 「アボリジニのオルタナティブ観光とその意味－アーネムランドでの試みから」『第 24 回北方民族文化シンポジウム報告書』、43-48.

マキャーネル・D

2012 『ザ・ツーリスト－高度近代社会の構造分析』安村克己・須藤廣・高橋雄一郎・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟訳、学文社.

太田好信

1993 「文化の客体化－観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57 (4)：383-410.

Rowse, T.

2000 *Indigenous Futures: Choice and Development for Aboriginal and Islander Australia*. University of New South Wales Press.

Ryan, C. and Huyton, J.

2000 Who is interested in Aboriginal tourism in the Northern Territory, Australia?: A cluster analysis. *Journal of Sustainable Tourism* №8(1), 53-88.

2002 Tourists and Aboriginal People. *Annual of Tourism Research* Vol.29-3, 631-647.

Schmiechen, J. and Boyle, A.

2013 Aboriginal tourism research in Australia. Butler, R. and Hinch, T. (eds.). *Tourism and Indigenous people: Issues and Implications*. Routledge, 58-70.

スミス・V 編

2018 『ホスト・アンド・ゲスト－観光人類学とはなにか』市野澤潤平・東賢太朗・橋本和也監訳、ミネルヴァ書房.

Tourism Research Australia

2010 *Indigenous Tourism in Australia: Profiling the domestic market*. Tourism Research Australia, Department of Resources, Energy and Tourism, Australian Government.

アーリ・J ＆ ラースン・J

2014 『観光のまなざし〔増補改訂版〕』加太宏邦訳、法政大学出版局.

Whitford, M.

2009 Aboriginal and Torres Strait Islander’s Tourist Policy: the Current State of Play. *Journal of Tourism, Hospitality & Culinary Arts* Vol.1-3, 19-42.

Zeppel, H.

1999 *Aboriginal Tourism in Australia: a research bibliography*. CRC for Sustainable Tourism.